

Conferencing News & Analysis-- Independent & Unbiased Perspective Since December, 1999

電話会議・テレビ会議・Web 会議専門ニュースレター Vol. 6. No. 4 2004 年 2 月 29 日号 毎月 15 日・月末発行

創刊 1999 年 12 月 8 日 発行/編集: 橋本啓介 k@cna.jp Copyright 2004 Kay Office All rights reserved.

ニュースダイジェスト

■シスコ、デスクトップ IP テレビ会議ソフトウェア、 CallManager 4.0、Cisco MeetingPlace 8106 リリース、 TANDBERG1000 が SCCP サポート

米シスコシステムズは、PC 向けのデスクトップ IP テレビ会議ソフトウェア「Video Telephony Advantage Release 1.0」をリリースした。定価は、190USD(約 2 万円)。同製品は、ソフトウェアと USB ポート対応のウェブカメラ(見た目は、ロジテックの QcamR Pro 4000 にシスコのロゴが付いたものに見える)が同梱されているもの。

製品自体は、シスコの IP Phone 7960 など、ソフトウェアと USB カメラを付けた PC をイーサネット経由で接続する。ソフトウェア自体は、USB カメラの制御や IP 電話との連携などの制御を行う機能を持つようだが、テレビ会議機能は、電話通信機能の一部として動作する (Video is a part of a phone call) 仕組みになっているため、音声通話、テレビ会議通話は別々には動作しない。

シスコのウェブサイトの記事で、James Tighe 氏は、テレビ電話機の画面を使うというよりは、すでにオフィスに行き渡っている PC と Cisco IP Phone を連携させ、PC 側でクオリティの高い映像を実現するのが理にかなっていると述べている。PC と Cisco IP Phone をいかに連携させるかということが今回のコンセプトのミソで、最初の“ひらめき”は 3 年前だったそうだ。それは USB(ユニバーサル・シリアル・バス)を採用できるとひらめいたからだ。しかし、一番苦心したのは、Video Telephony Advantage が、PC にインストールされている他のソフトウェアと干渉しないかパフォーマンスに影響がでないかという点だったそうだ。カーネルの部分からインプリメントを図ったようだ。

基本的に、H.323 のテレビ会議端末、タンバーク、ポリコム、ラドビジョンなどの製品との通信は行える。しかし、タンバークの TANDBERG1000 と TANDBERG550 は、シスコの SCCP を最近サポートしたため、IP Phone として動作し、今回新たに発表されたシスコの Call Manager 4.0 とシームレスに連携して動作する。

タンバークのテレビ会議システムは、シスコの SCCP (Skinny Call Control Protocol: Cisco IP Phone での VoIP 通話シグナリングに使用されるシスコ独自の通信プロトコル) をサポートするため Call Manager 4.0 の機能を使ったさまざまな通信サービスを利用できるが、現時点では、アナリスト向け発表会によると、他の AVVID パートナー、ポリコムやラドビジョンの製品は、SCCP をサポートしていないため、基本的な H.323 通信のみという状況のようだ。

また、ひとつの番号で音声通話とテレビ会議通話を自動的に使い分けることが出来る。たとえば、この Video Telephony Advantage Release 1.0 をインストールした PC と Cisco IP Phone 同士が通話をするとなると、相手の状態、

つまりテレビ会議で通話できるのか、あるいはテレビ会議機能がないので音声だけで通話ができるのか、を事前に”ネットワークのインテリジェンス(シスコの担当者の言葉)”で自動識別し、相手がテレビ会議で通信できるようであれば、テレビ会議で通話が行える。また、テレビ会議の映像自体を転送することもでき、転送したテレビ会議の通話は転送先の人と引き続きテレビ会議での通話ができる。しかし、転送先がテレビ会議の機能がなければ、たとえば音声通話になり通話が継続するという仕組み。

テレビ会議機能としては、たとえばミュートが行え、ミュートすると音声だけでなく映像も止まった感じになり、ホールドすると PC のスクリーンに表示されている自画面と相手画面が一時的に消える。ホールドをオフにするとまた元通り表示される。

テレビ会議の使用帯域については、アナリスト向けの発表会によると 128kbps 以上の帯域をサポートしているようだが、テレビ放送並みのハイクオリティの映像通信を行うのであれば、4.7Mbps の帯域が必要になるため、閉域高速 LAN 内などでの使用を想定しているようだ。

Cisco Call Manager は、Cisco AVVID ネットワークの中で呼処理を行うソフトウェアコンポーネントで、IP Phone などの通信を司るが、今回バージョン 4.0 をリリースした。関連のプレス

リリースによると、SIP をサポートすることにより、Call Manager は、Cisco MeetingPlace (音声・ウェブ会議サーバー)、Cisco BTS10200 ソフトスイッチ、またはシスコやサードパーティの SIP プロキシサーバーなどと連動することが可能。また、シスコ・セキュリティ・エージェント(CSA)でセキュリティの脅威から保護する仕組みも強化する。

また、「Cisco MeetingPlace 8106」については、もともと米 Latitude 社の開発した製品で、昨年シスコが同社を買収している。(CNA リポート・ジャパン Vol.5 No.19 2003 年 11 月 15 日号 参照)。Cisco MeetingPlace 8106 は、音声会議やウェブ会議を行える会議サーバーで、75,000 ライセンスが今まで販売されている。旧 Latitude はシスコのもともと AVVID パートナーであった。Call Manager との連携は以前からサポートされており、Latitude も SIP には力をいれていたところ、両社が合意し買収、シスコの一部門として吸収された。

MeetingPlace と IP Phone との連携によって、たとえば、Cisco IP Phone から MeetingPlace の会議参加スケジュールの参照、会議の開始などの操作を、IP Phone のディスプレイ上のソフトキーを使うことによりリアルタイムの会議に参加できる。

価格としては、現在出荷中の CallManager4.0 と Cisco Media Convergence Server のセットで 5,995USD (約 65 万円)、北米では 4 月から販売の Cisco VT Advantage 1.0 が USB カメラ付きで 190USD (約 2 万円)、2004 年 2 月から出荷を開始する Cisco MeetingPlace 8106 がソフトウェアとライセンス付きで、69,995USD (約 760 万円)。日本での時期を含む販売計画及び価格については、CNA リポート・ジャパンでは未確認。

シスコシステムズ社が IP テレビ会議ソフトウェアを近いうちにリリースするとこの CNA リポート・ジャパンで報告したが (CNA リポート・ジャパン Vol.5 No.21 2003 年 12 月 15 日号 参照)、今回米本社での発表となった。

【編集長橋本のコメント】

シスコが今回、電話の一部としてテレビ会議機能を付加したということは、それもそのテレビ電話ソフトだけで儲けようと言うビジネススタンスではないと思われる。

CallManager4.0 などの売上げを除いて、仮に定価

190USD で現在 Cisco IP Phone が 250 万台設置されている 8 割の 200 万台がこの IP テレビ会議機能を付加するためソフトウェアと USB カメラを購入したとしても、売上げはざっと計算しても 3 億 8000 万 USD (約 415 億円) 程度、つまり 2003 年のシスコの売上げ 189 億 USD (約 2 兆 1000 万円) からすると、約 2% 程度だからである。

それよりも、IP テレビ会議というよりボリュームの大きいパケットがネットワークを流れ出すことによる、ネットワーク装置などに対する需要の喚起、また、製品における差別化による競争力の強化、また、AVVID パートナープログラムや CPN プログラムの訴求力のさらなる強化を図っていくのではないかと推測する。テレビ会議メーカーで AVVID パートナープログラムに参加することを検討中、あるいは現在手続きを行っているところも何社かあるのではないだろうか。

いずれにしてもユーザーの視点からみた場合、日頃慣れて (次頁に続く)

<広告> トータル・ビデオ会議システム



<広告> イスラエル VCON のテレビ会議製品情報 (日本語): 日本地方自治体等導入実績あり、PC タイプのテレビ会議システムからセットトップタイプのものから MXM メディアエクステンジサーバー、MCU、ストリーミング、開発ツールキットなど幅広いニーズに対応。テレビ会議メーカー、大手 5 社に入る。

詳細上イメージをクリック! H.323 対応 PC 用会議システム vPoint
VCON <http://www.vcon.com>



「日商エレクトロニクス株式会社」
H.323 テレビ会議とストリーミングを融合、
STARBAK TORRENT VCG
<http://www.nissho-ele.co.jp>

いる音声の通話にテレビ会議の機能が付加される、そしてその操作性は統合的かつ一元的であれば、ユーザーの利便性は高い。寧ろ、テレビ会議の機能を電話機能の一部とする位置づけで開発した今回の製品は、別々な独立した機能として提供すると、テレビ会議を利用するというモチベーションが、電話を利用するということと比べ低いということを見越して、ユーザー側の心理的な敷居をなくすという意図が見えるような気がする。

シスコのVoIPの大きな流れからみれば、電話にテレビ会議機能を組み込む(Video is a part of a phone call)というのは至極自然なアプローチだと思う。

■アバイヤ社、SIP ベースのリアルタイム・コラボレーションソリューション

米アバイヤ社のプレスリリースによると、さまざまなIP関連の通信アプリケーションをワンプラットフォームに統合したSIP ベースのコミュニケーション・ソリューションを発表した。SIP は同社が提供する MultiVantage コミュニケーションアプリケーションでサポートされる。

そのソリューションにより、インスタントメッセージング、電話会議、ボイスメール、ブラウザーからClickダイヤルで通話ができる機能、在席確認や最適な通信ツールの選択が可能なプレゼンス機能などが提供され、それと同時に、トランスポート層のセキュリティ機能を使い、セキュアなSIPのシグナリング、インスタントメッセージングの暗号化を、SIP アプリケーションサーバーである「Avaya Converged Communication Server」へ統合することにより各種コミュニケーションアプリケーションを一元的に操作運用することができる。

たとえば、インスタントメッセージングと電話会議が連携すると、インスタントメッセージングによるチャットセッションから必要に応じて電話会議へシームレスに移行し、コミュニケーションを継続することができる。さらに、電話会議に複数の参加者を呼びたい場合、インスタントメッセージングにより参加者を呼び出して会議に参加させることができる。

「Avaya Converged Communication Server」は、「Avaya Communication Manager (IP 電話機等を制御するテレフォニー・アプリケーション・ソフトウェア)」、「Avaya IP Softphone R5 With Instant Messaging」、「Avaya 4602 SIP Desktop Phone」などと連携して、上記機能などを提供する構成とな

っている。

【編集長橋本のコメント】

シスコ社とタンバーク社の関係強化とは対照的にアバイヤ社とポリコム社が関係を強化するというレポートは以前行った。(CNAレポート・ジャパン Vol.5 No.21 2004年12月15日号参照)

今回アバイヤ社が発表したプレスリリースには、あくまで音声とインスタントメッセージング系の連携にフォーカスした内容記述でIP テレビ会議については言及がなかったが、アバイヤ社とポリコム社の提携アナウンスによる成果物が今年の中間頃か後半までにはIP テレビ会議関連のなんらかの製品が出てくるのではないかと推察する。

アバイヤ社とポリコム社の提携は、ポリコムサイドから見ると、ほぼポリコム製品全般に渡ってアバイヤ製品との統合、連携を図ることになっており、アバイヤ社が全世界的にポリコム製品の販売サポートを強化する。

■タンバーク、2004年度は“革新の年”、シスコシステムズとの関係強化

2004年2月19日に開催されたノルウェーのタンバーク社の四半期中間事業報告発表によると、2004年はタンバークにとって“革新の年 (Year of Innovation)”になると見ている。

今回の発表の前に、シスコシステムズとタンバークのIPテレフォニーによるテレビ会議ソリューションを発表 (TANDBERG1000と550がシスコの通信プロトコルSCCPに対応しCallManager4.0と連携する機能を付加した、「TANDBERG 1000 for Cisco CallManager」と、「TANDBERG 550 for Cisco® CallManager」と名称が変わっている)したことを報告し、2001年にタンバークがシスコのAVVIDパートナープログラムに参加してから2年間の成果という形で同社は見ていると同社CEOのAndrew Miller氏は述べた。製品の出荷自体は、プレスリリースによると、2004年2月18日からとなっている。

さらに、今回のシスコとタンバークは、今回のソリューションがマーケットにとってはブレイクスルーであり、タンバークが昨年ぐらいから繰り返し述べていた、2004年テレビ会議転換点説 (Inflection Point)の一環と捉えている。Q&Aではポリコムとの競争関係について問われた同氏はコメントを避けたが、今

回のシスコとの共同ソリューションについては、市場全体にとっていい影響があるものとの見方を示した。

また同発表の中で、今回のソリューションが、ビジュアルコミュニケーションが“電話みたいに簡単になった”という段階から、すでに“電話になった”と同社では見ている。シスコシステムズとの戦略的関係は長期的に今後も強化されていくようだ。

翻って事業展開については、全体的にユーザーの消費パターンは通常の季節的な変動に応じて推移しているとみており、そして2003年の売上げの底打ちからの回復基調の勢いが、そのまま2004年度にも継続することを期待している。

地域別では、売上は北米、欧州・中東・アフリカ、アジアと各地域とも増加基調を呈している。北米では、医薬品関係や裁判所関連での大型導入、欧州では、欧州・中東・アフリカ担当の担当社長が就任、目を転じてアジアについては、2004年1月-3月期において、中国の旧正月が販売に影響を与えるとみているが、年間ベースでは売上は拡大すると予測する。

ASP(平均販売単価)及び売上総利益は堅実に推移しているが、マーケット自体は、引き続きチャレンジングな状況と見る。加えて、事業的な“視界”と“予測性”については改善傾向と見るが、保守的に控えめで、注意深く楽観視している。

同社は、今までの業績発表ではノルウェーの通貨にて各数値を発表していたが、2004年1月-3月期より、アメリカドルベースでの数値発表に移行する。

また、タンバーク社では、CFO(最高財務責任者)の交代が行われ、今までCFOを務めていた Terje Rogne 氏は、新たに設置された、事業オペレーション担当上級副社長職に就任し、新CFOには、外部から Michael Ketchan 氏が就任した。中間事業報告発表での同社CEO Andrew Miller 氏によると Michael Ketchan 氏は、アメリカを拠点にCFOの業務を執行するようだ。

【編集長橋本のコメント】

タンバークとシスコとの関係強化は、今後アバイヤとポリコムの関係にどう影響してくるのか。今回のシスコとタンバークの関係強化は、シスコとアバイヤなどのIPテレフォニーで

の市場における競争の文脈から見ていったほうがすっきりする感じがする。

シスコが同社のホームページで、シスコのIPテレビ会議ソフト関連のニュースを、Cisco@Newsにおいてストリーミングで流していたが、そのところどころでタンバークのテレビ会議システムがそれとなくとか、アップに写っていたりという場面があったが、そこに暗示しているものは、アバイヤとポリコムに対するメッセージではなかったのかと感じたのは私だけだろうか。

つぎに、今回新たにCFOが就任した。タンバークは、同社のテレビ会議売上げの63%(CNAレポート・ジャパン Vol.6 No.2 2004年2月15日号 参照)が北米市場から来ている。今回新たにアメリカ人のCFOを採用したということと、業績発表数値を米ドルで表示するということは、今後のアメリカ市場重視を更に推し進めるものと捉えるのが自然ではないだろうか。

現在ノルウェーの証券取引所において同社は上場しているが、アメリカ市場において事業を効率よく展開し、必要な大型の事業資金を柔軟に調達するということを考えた場合、近い将来アメリカのナスダック市場に上場を目指すという可能性はあるのではないかと。ノルウェーから事業資金を北米に持つとなると、基本的にノルウェーの現地通貨による調達と思われるため、米ドルへの交換による外貨交換リスクやタイムラグなどの可能性が推測される。その場合、事業をメインで行う所で必要な資金を柔軟にかつ早急に調達する方策をとるのは企業にとって合理的な判断ではないかと推察する。

タンバークは英語で四半期の事業報告を行っているが、また企業によって必要性は変わるが、同社は中間報告も今回のように行っている。それは、出来る限りの財務状況等の情報開示を行っていくというタンバークのスタンスを示すものであって、機関投資家やアナリストなどに対しては好意的に受け入れられる可能性は高いと思われる。

つまり、この中間報告を実施するということは、今後のナスダック市場を目指し、アメリカでの事業資金を円滑に調達するという同社の財務戦略を展開するための布石ではないかとも感じる。

■NEC エンジニアリング、電話会議端末 SIP 対応等機能強化



VoicePoint IP

NEC エンジニアリング(東京都港区)が現在販売している H.323 の IP 電話に対応した電話会議端末「VoicePoint IP」の機能強化を行った。機能が強化された製品及び無償アップグレードは、2003 年 4 月上旬から開始。

同社では、ブロードバンド IP 常時接続サービスやそれに伴う IP 電話サービスの普及、そして SIP に対する関心と実装がすすんでいるということから、VoicePoint IP の SIP 対応を行った。SIP サーバーを介した電話会議だけでなく、7kHz の帯域を使うため、通常の電話会議端末に比べ高品質な音声会議が行える。

今回の主な機能強化は、(1)H.323 プロトコルと SIP に対応、(2)エコーキャンセラー性能の向上(エコーキャンセル可能な遅延時間を従来比2倍とした)、(3)初期設定やメンテナンス等の設定メニューの操作性を改善し、対話形式による直感的な操作にした、などがある。

VoicePoint IP の回線インターフェイスについては、Ethernet 10Base-T/100Base-TX に対応以外に、アナログ回線用も装備する。内蔵マイクは、本体 4 ヶ所にあり、音声入出力はアナログ音声入出力に対応。ミュート機能。音声プロトコルは、既述の H.323、SIP、PPPoE、UPnP、GateKeeper、符号化方式には、G.711、722、728 をサポートしている。

また、PHS や携帯電話を回線インターフェイスとして使うこともでき、その場合は、VoicePoint IP と PHS や携帯電話と接続するためのケーブル、PHS 携帯電話用接続ケーブルをオプションで購入する。

現在、すでに VoicePoint IP(IP モデル:AEC-601)の既存ユーザーは、同社のホームページから最新のファームウェアをダウンロードすることにより無償のアップグレードが可能。アナログ電話回線対応の Basic モデル(AEC-60B)を導入済みユーザーについては、VoIP アップグレード(2 万円)を購入すると SIP 対応の IP モデル(AEC-601)へバージョンアップが行える。

販売価格は、従来価格を据え置き(AEC-601:168,000 円、AEC-60B:148,000 円)、アナログ回線に対応した Basic モデルと合わせて年間 5000 台の出荷を見込む。

■ロードオブザリング、ポリコム製のテレビ会議を使い制作

米テレビ会議メーカーのポリコムの発表によると、ピーター・ジャクソン監督の「ロード・オブ・ザ・リング」の制作に、ポリコムのテレビ会議システムが活用され、撮影に関わる時間の短縮、そして制作コストの削減などに貢献した。「ロード・オブ・ザ・リング」の最終章「王の帰還」は、日本では、2004 年 2 月 14 日から全国公開された。

映画撮影は、ニュージーランド内の 150 ヶ所のロケ地で 274 日間という短期間で行われ、ポリコムのテレビ会議システムは、撮影用のカメラと接続、英国のパインウッド編集スタジオ、ニュージーランド・ワークスのメインスタジオ、及びその他のロケ地から通信衛星による高速ネットワークを通じて監督が撮影されたそのままの映像を確認、現地の撮影スタッフとリアルタイムで映像によるコミュニケーションが行えた。監督は、適宜、例えば照明やカメラアングルの変更、登場人物の動きや演技をその都度確認しながら指示を与えることが出来た。

【編集長のコメント】

これはポリコムのテレビ会議システムが示す高い性能の一例だと思うが、私自身こういった使い方を見たのは初めて。また、10 年前、あるいはそこまできかなくとも 97 年頃のテレビ会議システムであっても、ここまでは出来なかったのではないかと思う。テレビ会議システムの進歩を感じるし、隔世の感がある。

私の 4 歳の子供は、最近テレビ会議という言葉をよく使うし、テレビ会議システムの前に立って手を振ったりもして楽しんでいる。この子が成人して働き出すころ、20 年弱後にテレビ会議は、一体どのような進化、発展を遂げているだろうかと思

すると非常におもしろいと思う。もっと想像もつかない使い方がこれから沢山でてくるかもしれない。

■ポリコム社と Sonim Technologies 社、モバイル携帯会議で提携

米テレビ会議メーカーのポリコムと、IP ワイヤレスボイスアプリケーション開発を行う Sonim Technologies 社が、提携した。今回の提携により、モバイルユーザーが、直接モバイル端末からグループ会議を開始したり、行ったりする機能を提供するソリューションを共同で開発する。

■プレミア コンファレンシング、新ウェブ会議サービス

米PTEKホールディング傘下企業である、米プレミア コンファレンシング社は、同社独自で開発した、ウェブ会議サービス「Ready Conferece Plus」の提供を開始した。同サービスは現在音声だけの電話会議のユーザーが、前もって資料を送ったりする手間を省き、プレゼンテーションをリアルタイムで共有する便宜を提供するサービス。

同サービスは、プレミア コンファレンシングの研究開発チームが低コストで簡単に利用できることをコンセプトに開発した。既存のさまざまなウェブ会議の中で、高機能ながら運用が大変でコストが高いウェブ会議機能に対して代替的で簡易なものを提示できないかと考えた。

PTEK ホールディングは、この「Ready Conferece Plus」をまず北米の同社の直販部隊を通して既存のユーザーに販売展開を行った。その結果現在 500 以上の法人アカウントが「Ready Conferece Plus」の利用を開始している。

プレミア コンファレンシング社社長の Ted Schrafft 氏は、プレスリリースで「Ready Conferece Plus」のメリットについて言及し、「既存の同様なサービスに比べ大きな価格競争力があり、利用開始にあたってのトレーニングなどにかかる時間は少ない。」と自信を見せる。

「Ready Conferece Plus」は、今年中には欧州やアジアにも展開する予定とプレスリリースに書かれている。

■VCON 社の電話会議 MCU と WebEx のサービスの統合

イスラエルの VCON 社は、同社が提供する電話会議多地点接続装置 (MCU) である「VCON IGC2000」に、WebEx

社の「Meeting Center」サービスに対応する 4 ポートオプションモジュールを追加した。

このオプションモジュールを追加することにより、VCON 社の IGC2000 から WebEx 社の MediaTone ネットワークに接続が可能となり WebEx ウェブ会議サービスを利用することができる。そうすることにより、音声の会議だけでなく各種資料等の共有による会議が行える。

VCON は今回のソリューションの販売開始を、2004 年第二四半期 (4 月-6 月) の初め頃を予定している。

同社の CMO (最高マーケティング責任者) である、Gordon Daugherty 氏によると、今回の VCON の製品と WebEx 社のウェブ会議サービスの統合したソリューションは、もともとチャネルパートナーや顧客の要望に基づいたものと説明している。

IGC 2000 電話会議多地点接続装置は、2003 年 11 月 25 日に同社のプレスリリースから発表されている。Remotability 社の買収による成果物。(CNA リポート・ジャパン Vol.5 No.19 2003 年 11 月 15 日号 参照)

■クリアワン、社長兼 COO 退任一家庭の理由で

電話会議端末などを提供する米クリアワン社の社長兼最高業務執行責任者 (COO) である、Greg Rand 氏が退任することになった。理由は個人的、家庭の理由によるもの。

同氏は、クリアワンに COO として 2002 年 8 月に就任し、2003 年 4 月からは社長職も務めていた。その期間、製造、購買、情報技術、ビジネスサービスなどを統括して会社に貢献してきた。今回の退任は、家庭の理由によるもので、クリアワン本社があるソルトレークシティから、アトランタに帰るといったことになった。本人として退任することは、非常に難しい決断だったと述べている。

同社 CEO Mike Keough 氏は、今回の退任を受けて、同社の社長職に就任し、Greg Rand 氏の後任である、事業オペレーション担当副社長を探す間の当座 Greg Rand 氏の責務を引き継ぐ。同社 CEO Mike Keough 氏は、Greg Rand 氏の退任について非常に残念であるという気持ちを表すと同時に、今までの会社への貢献を称えた。



<広告>

シード・プランニング(株)

業務用TV会議システムのメーカー、ベンダー約 40 社を徹底調査したレポート発刊。2010 年迄の市場予測。

<http://www.seedplanning.co.jp>

■スペクテル社、SIP ベースのサーバーリリース、他社メディアサーバーとの連携可

コンファレンスソリューションを提供する米スペクテル社は、2004 年 2 月 24 日に「Spectel MeetingXchange」をリリースしたと発表した。

Spectel MeetingXchange は、SIP ベースの音声会議やウェブ会議サーバーで、サービスプロバイダーやエンタープライズ向けに開発された。Spectel MeetingXchange は、SIP コンファレンシング・アプリケーション・サーバーとして、他社のメディアサーバー（例えば、Convedia 社）と連携し制御することが可能。また、「Spectel IP7」と統合させたソリューションとしても提供可能。

API(アプリケーション・プログラミング・インターフェイス)に対応し、サービスプロバイダーにある既存のアプリケーションなどとの連携統合も可能で、サービスの差別化や開発コストの軽減が可能とスペクテル社では見ている。

またスケーラビリティ性も高く、数千の同時音声セッションの処理も行える。

提供機能としては、会議の予約不要サービス機能、オペレータ介在会議、イベント運営、ウェブ会議機能、モバイル機能などの基本的な機能と、インスタントメッセージングやプレゼンス機能なども提供している。

ウェブ会議、テレビ会議、電話会議サービスを提供する、米 Enunciate Conferencing 社にすでに、導入が決まり、同社では Spectel MeetingXchange と米 Convedia 社のメディアサーバーと連携統合させて、IP ベースの音声会議サービスなどを提供する予定だ。

■GlowPoint 社、シスコの CPN プログラムへの参加

米の IP テレビ会議サービスを提供する GlowPoint 社は、シスコシステムズが提供する Cisco Powered Network プログラムに参加したことを発表した。

IP テレビ会議サービスで、シスコの CPN に参加するのは GlowPoint 社が最初の企業とのこと。

シスコの Cisco Powered Network プログラムは、ネットワークサービスなどのサービスプロバイダーが認定されるもので、企業のユーザーがさまざまなネットワークサービスを選定する際の指標を提供するプログラム。つまり、CPN プログラム参加企業が提供するネットワークサービスのプラットフォームには、シスコの最新の技術が採用されているということの意味する。

GlowPoint 社の CTO (最高技術責任者)である Mike Brandofino 氏は、次のように述べ「GlowPoint のネットワークでは、通信事業者クラスの高いレベルのサービスをサポートするために、シスコの製品が我々のコアインフラに活用されている。これにより、ネットワークの安定性とパフォーマンスが保証され、ネットワークへの負荷が大きいテレビ会議サービスに対応している。私どもの顧客は、GlowPoint のネットワークサービスの信頼性をよく理解している。今回の CPN プログラムへの参加は、世界のネットワーク機器のリーディング企業が折り紙を付けたネットワークサービスを我々が提供していることを示す。」とコメントしている。

■GlowPoint 社、第三者割当による増資

米の IP テレビ会議サービスを提供する GlowPoint 社は、第三者割当により 1370 万 USD (約 15 億円)の増資を行った。増資は、1株あたり 2.25USD で、610 万の普通株式発行によるもの。また、当該株式引受人に対して、183 万株に相当するワラント(新株引受権)を発行し、ワラントの有効期間は 5 年半とした。

今回の増資による手取金については、GlowPoint 社では、販売やマーケティング関連へ重点配分を行う。同社 CEO David C. Trachtenberg 氏は、今回の増資について、同社事業に対する信任投票を得たと捉えている。

■BT コンファレンシングと WebEx 社、ヨーロッパ市場向けサービス展開

英の BT コンファレンシングは、現在同社のウェブ会議、電話会議、テレビ会議サービスの中で、同社自身が開発したウェブ会議サービスと、WebEx のウェブ会議サービスを同時に提供しているが(CNA リポート・ジャパン Vol.5 No.20 2003 年 11 月 30 日号 WAVE リポート参照)、今回新たに WebEx と協同でヨーロッパのユーザー向けに開発したウェブ会議サービスをリリースした。その名を、「BT Meeting Centre, Powered by WebEx」と呼ぶ。

「BT Meeting Centre, Powered by WebEx」は、「BT MeetMe」と、BT が提供している予約不要の電話会議サービスからアクセスできるサービスで、音声だけの電話会議から資料共有などができるインタラクティブなウェブ会議ミーティングに簡単にスイッチできる。

「BT Meeting Centre, Powered by WebEx」は、使った分だけ利用料金を支払う方式のサービスで、月定額料金としての顧客側のコミットメントは不要のようだ。そのため顧客側から見た場合、コストコントロールが容易でウェブ会議ミーティングを簡単に始めることができるという。

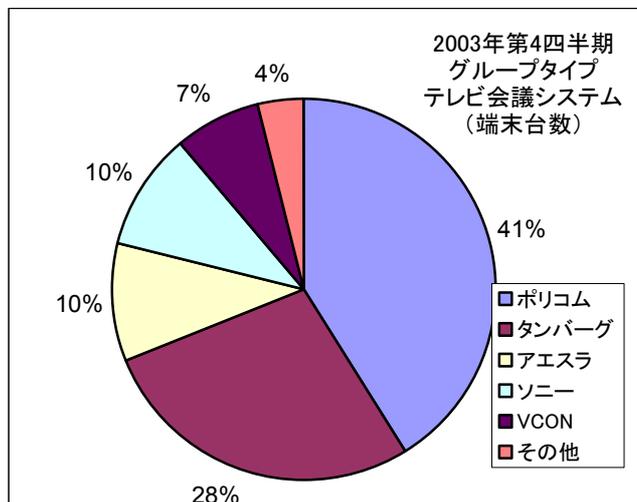
■ACT テレコンファレンシング社、第三者割当による増資

米のコンファレンスサービスプロバイダーである、ACT テレコンファレンシング社は、第三者割当株式発行による増資を実施した。割当額は、330 万 USD (約 3 億 6 千万円)。一株当たり 2.20USD で 150 万株を発行した。そのうち、3 年間有効な 34 万株に相当するワラント(新株引受権)も含まれる。実行価格は、2.20USD。2004 年 2 月 27 日現在の同社ナスダック株価は 3.21USD。同社株価は、2003 年 9 月頃から横ばいから低落傾向に入り、2003 年 12 月 24 日に 1.06USD の最安値を記録した。しかし、その後株価は特に年を越えて 2004 年に入り上昇傾向を示している。

「今回の増資により、現在同社が抱えている負債を減らし、資産から負債を引いた純資産価値を高めるのが目的。金利の高い負債を中心に選択し返済する。」と同社 CEO Gene Warren 氏はコメントを出している。

■中央ヨーロッパテレビ会議市場状況(ドイツ、オーストリア、スイス)2003 年 10 月-12 月期

情報提供: Ant Bilsev /VTRON GmbH



* 端末台数によるマーケットシェアを示す。

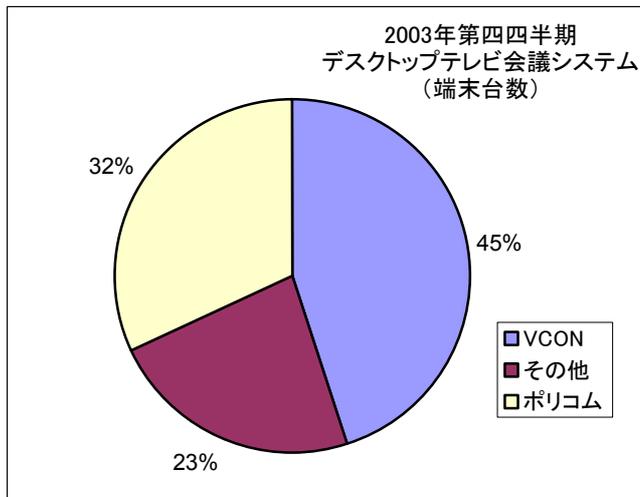
ドイツで「Videoconferencing In Europe」を発行する VTRON 社の Ant Bilsev 氏がまとめた、2003 年第 4 四半期の販売端末台数ベースでの、ドイツ、オーストリア、スイスにおける総合市場シェアについてはグラフの通り。1 枚目のグラフがセットアップなどのグループタイプのテレビ会議の状況で、2 枚目のグラフが PC タイプのデスクトップタイプのテレビ会議システムを表す。

VTRON 社の調べによると、2003 年第 4 四半期は、第 3 四半期に比較して約 20%増を記録した。

アエスラ社は、前四半期のマーケットシェアが 13%であったが、販売台数を減らし、その間ソニーが販売台数を増やしたことにより、パーセンテージベースでは並んだ形になった。

ポリコム社、タンバーク社とそれぞれ前四半期に比べ、2ポイント、3ポイント増とマーケットシェアを増やしたが、タンバーク社は、前四半期に比べ大幅増を記録。

ポリコム社の数値は、詳細数値を得ることができていないため、販売代理店などの数値と独自の推計値によって台数を算出し、シェアを出した。



* 端末台数によるマーケットシェアを示す。

また、PC 向けのデスクトップ会議システムについては、体勢は変わらないが、ポリコムがシェアを1ポイント増、VCON 社が1ポイントダウンという結果に終わった。



VTRON <http://www.vtron.de>

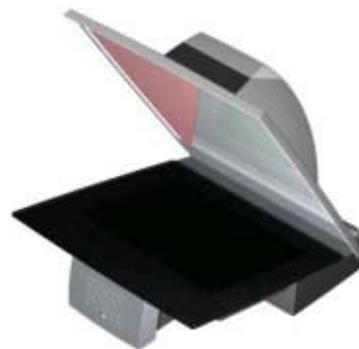
Ant Bilserv ant.bilsev@vtron.de

■ Ex'ovision 社、EyeCatcher 新製品発表



オランダの Ex'ovision 社が、アイコンタクトを重視して開発したデスクトップタイプのテレビ会議システムの後継版が発表された。初期モデルは、昨年のロンドンでレポートした WAVE (CNA リポ

ート・ジャパン Vol.5 No.20 2003 年 11 月 30 日号 参照)で同社が英の販売パートナー Fast Communications 社と協同で出展していた。



写真で出ている製品は、Fast Communications 社、事業開発担当シニアマネージャーの Bill Mead 氏によると、2004 年 6 月に新たにリリースされる予定の EyeCatcher で、価格は、7950EURO

(約 87 万円)。製品の仕様書によると、ISDN (H.320: ~ 384kbps) 及び IP (H.323: ~ 768kbps) に対応し既存のテレビ会議システムなどと通信が行える。また映像符号化には、H.261、H.263、H.264 などをサポート。映像音声 (IN/OUT)、XGA (IN/OUT)、音声符号化については、G.711、722、722.1、728 をサポート。内蔵 MCU を搭載、ワイヤレス LAN 対応。言語は 11 カ国語をサポートしており中国語や日本語も含まれる。カメラを半透鏡 (Beam Splitter) の後ろ側に設置。

机上等に設置して利用するように設計されているため、ユーザーは半透鏡に向かって話しかけることによりアイコンタクトが取れた自然な会話ができると同社では見ている。

使用コーデックについては外部のテレビ会議メーカー製のものを使っている。同氏によると、日本での販売も視野に入れていると述べていた。

企業訪問 イタリア Aethra (アエスラ)



アエスラ日本語サイト
<http://cnar.jp/aethra/>

2004 年 2 月 16 日から 21 日の 6 日間イタリアのテレビ会議メーカー Aethra (アエスラ) の企業訪問を行ってきた。今回の

訪問は同社による招待であるため、CEO 兼創業者である



Giulio

Viezzoli 氏以下社員の方々へ感謝の意を表したい。

アエスラがあるアンコナ市は、イタリアの東部中央に位置した

アドリア海に面した人口 10 万人ほどの市で、港町でもある。アドリア海は初めて見たが非常に美しく、ホテルの近くにはギリシャ風の建物もありギリシャとの歴史的深い関わりも伺わせる風情の感じられる町。

そのアンコナ市にアエスラを設立したのが 1972 年、それ以来イタリアテレコムとの関係は深く、設立以来ネットワーク通信機器などを開発してきた。現在は、ISDN や xDSL の関連の製品、テレビ会議システム、音声会議システム、音声・ビデオ・データサービス向けのマネージメントソリューションと幅広く製品を扱っており、世界 60 カ国以上で販売している。また、Aethra.Net と呼ばれる関連会社では、テレビ会議、ウェブ会議、電話会議サービスも行っている。

工場は自社では持っておらず、外部の企業に委託して 7 ヶ所の工場(イタリア国内 6 ヶ所、中国 1 ヶ所)でアエスラの製品が製造されている。

テレビ会議システムにおいては、過去 10 年で今までに 10 万台の設置実績があり、世界では第四番目の大手テレビ会議メーカーとして評価(米 Wainhouse Research 統計による)されている。また地元イタリアでは、市場シェアの 8 割をアエスラのテレビ会議システムで占めている。また、ポータブルテレビ会議システム Voyager は、アフガニスタンやイラク戦争など



の現場レポートなどにジャーナリストから活用されたそうだ。

また、xDSL モデムについて、同社のテレコムマーケティングディレクターの Vincenzo Gulla 氏によると EMEA 地区ではシェア的に 8 割-9 割以上の台数を出荷しているそうだ。

設立以来 R&D 重視の姿勢は同じで、それも同社創業者である Giulio Viezzoli 氏自身がエンジニアであるということから技術指向が強い現れで、売上げに対する 16%を R&D に投資しているという。

今回の訪問では、CEO Giulio Viezzoli 氏の子息である、Marco Viezzoli 氏からまず社内を案内してもらい、各部署の説明と、テレビ会議システムの試験室などを拝見し、R&D や品質管理の重要性を説明していただいた。同社では、ISO 9001 を取得しており、今後環境関係の ISO14001 も取得する準備を行っているという。その後、アエスラの会社概要説明を、Marco Viezzoli 氏から受けた。

その後、テレビ会議システムのプロダクトラインとマーケティング活動状況、アジア太平洋地区のマーケティング活動状況、DSL モデムなどのネットワーク製品関係の事業状況、



Vega Star Silver-E スケーラブルソリューション

そして、テレビ会議技術のトレンドとアエスラのロードマップについて、Aethra.Net の説明などのプレゼンテーションを各事業部の責任者等から受けた。

アエスラとしては、3月下旬のドイツでの CeBit で「Vega Star Silver-E」を発表する予定で、現在あるセットトップタイプのテレビ会議システム「Vega Star Silver」シリーズを統合し、2Mbps IP Onlyをベースモデルとして、オプションとして、XGA I/O、Dual Video H.239、ISDN インターフェイス(6 チャンネル、3 回線)、内蔵 MCU(IP/ISDN 混在会議)、などを必要に応じて加えていくというビルドアップタイプ。また、Split タイプ、つまりカメラ部とコーデック部が着脱できるタイプも合わせて提供する。

さらに、AES にも対応し、他社端末とも暗号化された中での通信が可能。Silver タイプは、6000EURO (約 82 万円) から 12,000EURO (160 万円) のミッドレンジの価格帯に位置するのが Silver シリーズの製品。

ちなみに同社の上位機種になると、IP は 3Mbps まで対応し、内蔵 MCU で 7ヶ所までの IP/ISDN 混在会議が行える。また、内蔵のストリーミング機能により、テレビ会議の状況をリアルタイムにインターネットにストリーミング配信が行える機種もある。外部インターフェイス、たとえば CRESTRON や AMX などにも対応している。

最上位機種は、40 インチ、50 インチのプラズマディスプレイにも対応している「Super Nova Star」などもあり、テレビ電話から衛星用テレビ会議、セットトップ、ロールアウト・ルームタイプと幅広くテレビ会議製品を提供している。

また、コーデックタイプの製品についても刷新し新しい製品を Cebit に合わせリリースする予定だ。



いままでは、「Codec AVC8200」と「Codec AVC 8400」があったが、これらを「Codec 8400 Entry」と「Codec 8400

Super Set」としてリリースする。システムインテグレーション向けで、タイプによって、IP は 3Mbps まで ISDN は、2Mbps まで対応する (オプションになる場合もある) また、MCU 内蔵で IP/ISDN 混在で 5ヶ所から 7ヶ所までの多地点会議が行える。その他、XGA、ウェブストリーミング機能、ワイヤレス LAN などにもサポートしている。API を提供しており、AMX や CRESTRON のインターフェイスにも対応する。

技術トレンドなど今後のアエスラの技術ロードマップの説明をいただいた、テレビ会議 R&D マネージャーの Claudio Pnini 氏によると、現在のトレンドとしての LDAP や H.239 などのさまざまな技術トレンドについてはアエスラとしても十分フォローしていき、製品に取り入れていくスタンスのようだ。

また、現在同社のテレビ会議システムは、フィリップ社製の Trimedia チップを搭載しているが、来年1月以降の出荷から Equator 製のチップに移行する考えだそうだ。

2004 PRODUCT LINE MEDIUM-END



ROLLABOUT SYSTEMS



新たに昨年 ITU-T で勧告された新しいテレビ会議映像符号化方式 H.264 については、現行の Tri-media チップで対応させるが馬力が足りないというのが理由のひとつだ。

H.323 対 SIP 論争について聞いたところ、H.323 対 SIP は宗教戦争みたいなもので、最終的には政治力が物を言うと同氏は言う。SIP は、最終的にはテレビ会議において H.323 に対して優位性を持つ可能性は高いのではないかとの見方を示した。

アエスラは、世界 60 カ国で事業展開をしつつ、また中国では現地法人と工場を設立しながら日本は今まで真空地帯であったそうだ。同社では日本のプライオリティは高く、今後販売代理店などパートナーシップや、アエスラ製品の OEM 供給ビジネスも視野に入れてさまざまな可能性を模索していきたいながら日本での事業機会の発掘を行っていく。(終わり)



アジアビジネスには写真上記の方々が担当

【アエスラ連絡先】

Francesca Galeazzi
Communications & Corporate Relations, Manager
AETHRA SpA
Via Matteo Ricci, 10
60020 Ancona (Italy)
Telephone: +39 071 2189742
Fax: +39 071 887077
E-mail: francesca.galeazzi@aethra.com
WWW: <http://www.aethra.com>

イベント情報

■平成 15 年度「TOCSR(トクスル)」コラボレーションASP サービス関連総合テクニカルセミナー<第 5 回>の開催についてNTT-ME の世界最先端・日本最先端コラボ関連サービス&関連新商品「CollaboMate on the TOCSR」等のご紹介！

日 時:平成 16 年 3 月 9 日(火)13:30~17:30(受付開始 13:00 より)
会 場:神保町三井ビルディング 11 階 NTT-ME プレゼンテーションルーム
詳細:
<http://nttiivs.ntt-me.co.jp/seminar/2004/tocsr0309.html>

CCS Tokyo 2004 出展社募集中

今年も昨年と同様ウェブ会議、電話会議、テレビ会議をテーマとした展示&セミナー(仮称)CCS Tokyo 2004 の企画を行っておりますが、出展企業の募集を開始しました。

今年は、6月10日(木)、11日(金)と2日間、青山 TEPIA での開催を予定しております。

内容的には、展示とセミナーセッションの構成ですが、セミナーセッションは、ジェネラルトラック、テクニカルトラック、そして出展企業セッションを計画しております。

ジェネラルトラック、テクニカルトラックは、有料セッションですが、各種専門家、大学教授、弁護士などの先生方に講演していただく勉強的な内容で、出展企業セッションは各社出展企業による発表となります。テクニカルセッションについては早稲田大学の久保教授にコーディネートをお願いしております。

企画書は下記 URL に掲載しておりますので、ご興味がありましたらダウンロードしていただければありがたいです。

<http://cnar.jp/CCSTokyo2004.pdf>

2 月 25 日に第一回目の説明会を開催しましたが、第二回目の説明会を 3 月 10 日(水) 青山 TEPIA (<http://www.tepia.or.jp>) で予定しております。(10 時 AM~)

ご出席希望の企業様は、橋本宛に3月8日(月)までにご連絡いただければありがたいです。すでに第一回の説明会にご参加、あるいは個別にご説明させていただいたところについては内容的に同じですので必要はございません。

説明会には、お気軽にご参加いただければと考えております。

参加企業、後援、協賛企業につきましては正式決定次第、別途改めて正式に報告したいと思っております。

今年も皆様のご協力のもと開催できるようでしたら、微力ですが尽力させていただきますのでよろしくお願い致します。

ご不明な点等ございましたら、k@cnar.jp までお願い致します。

編集後記

業績発表 Part II は間に合いませんでした。次回号にてリポートいたします。ご容赦ください。

私が一番騒いでいますが、今年もセミナーを企画しました、私が個人的に思うところは、来場者の方(特にエンドユーザーの方)が、行ってみたい、当日来てよかった、と思ってもらえるものにこだわりたいと思っています。そうすることが来場者、出展社、主催者全員にとっての成功につながると思います。

そして、このセミナーが、来場者にとってウェブ会議、電話会議、テレビ会議ツールなどの有効性を理解していただく上での一助となれば幸いと思っております。

一步一步愚直に取り組みたいと思っております。そうすれば必ずブレイクスルーは来ます。よろしくお願い致します。

CNA Report Japan(シーエヌイー・レポート・ジャパン)
編集長 橋本 啓介 k@cnar.jp
(CNA Report Vol 6. No.4 2004 年 2 月 29 日号終わり)次号 Vol 6. No.5 は、2004 年 3 月 15 日頃の発行を予定しております。ご購入ありがとうございました。